國學院大學, 2024–2025年度 Visiting Fellows Program 最終報告書

Mariangela Carpinteri
08/22/2025

大祓の思想と儀式の変遷

私の國學院大學における研究期間は、2023年10月から2025年9月までのおよそ二年間にわたった。その間、2024年10月から2025年7月にかけて「國學院大學Visiting Fellows Program」奨学金を受給し、研究を延長することができた。これは研究にとって極めて貴重な機会であり、必要な資料を十分に収集するためには不可欠であった。大學は図書館の豊富な蔵書を利用する機会を与えてくださり、また複数の教授方との意見交換を通じて、多くのご助言を賜った。これらの支援は研究の進展において本質的な役割を果たした。さらに、奨学金期間の開始時と終了時には、研究成果の一端を発表する機会をいただき、その際に寄せられた質疑やご意見は、研究対象をより深く理解する上で大きな契機となった。以下に、本研究の概要を簡潔に示す。

思想の変遷

古代における祓は、罪や過失に対する懲罰的性格を帯びていたが、奈良時代には清めの意味が前面化した。天武天皇は大祓を国家的儀礼として制度化し、689年の「飛鳥浄御原令」により年二回の公式儀式と定められた。最初の実施記録は678年、干魃や彗星といった悪兆に対処するものであった。その後、大祓は清めと忠誠確認の象徴として政治的意義を担うようになった。

鎌倉時代には仏教の影響により、祓は密教儀礼と結びついて再解釈された。『中臣祓訓解』や『中臣被注抄』などにおいて、八百方の神は天部に、豊葦原の国は南閻浮提に比定され、祓はカルマを除去する行為とされた。このような仏教的再構築によって、祓は「本覚思想」と接続し、心性の回復を目指す内面的行為へと変容し、室町期以降さらに強化された。

江戸時代には、祓と自然環境との関係が注目された。山崎闇斎『風水草』は祓を陰陽の均衡回復と解し、六月・十二月の実施と結びつけた。岡熊臣『湖之八百会』は、穢が渦潮によって海へ流される様子を図示し、祓を地理的現象として捉えた。

現代においては、大祓は内面の清めを強調する解釈が広まっている。儀礼は六月三十日と十二月三十一日を基本としつつ、前倒し実施の例もあり、茅の輪が合格祈願や動物供養に利用されるなど、新たな展開も見られる。浅草神社や神田明神における船上の形代流しは、平安・鎌倉期に行われた大祓の古代的様相を想起させるものである。

儀式の変遷

奈良時代の大祓は、午前の「節折の儀」「ミアガの儀」と午後の本儀から成る二部構成であった。本儀では中臣氏による詞の奏上と、形代を川に流す儀式が最も重要とされた。平安時代には規模が縮小しつつも小祓が増加し、疫病や呪詛への不安に対応する形で広まった。

鎌倉時代には大祓の中心性は低下したが、『西宮記』や『公事根源』に茅の輪や芸能要素の導入が記録される。また、七瀬の祓や六字河臨法といった陰陽道・密教儀礼において、大祓的要素が吸収され継承された。江戸時代には茅の輪が庶民生活に浸透したことが絵画資料からうかがえるが、宮中での継続については未解明である。

外来の影響と罪・穢の関係

『大祓詞』には、中国道教の『赤松子章暦』や仏教の薬師信仰の影響が認められる。形代を水に流す行為は道教儀礼との類似が顕著であり、また薬師悔過と同様に病や災厄を罪として祓う構造が確認できる。古代には大祓が仏教儀式と併催される例も多く、両者は相互に影響しながら展開した。

『延喜式』の大祓詞には「穢れ」の語はなく、病や死が穢れと結びついていたかは議論が続く。近年の研究は、大祓と穢の結合は後世の思想的発展によるものであり、とりわけ室町期以降に形成された概念と考えられている。大祓は本来、儀礼秩序を再構築する機能を担っていた可能性が高い。